



マッド・ハイジ

2022年/スイス映画
配給：ハーク/92分

2023 (令和5) 年7月20日鑑賞

シネ・リーブル梅田

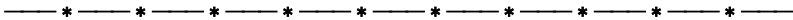
監督：ヨハネス・ハートマン
/サンドロ・クロプシ
ユタイン
原作：ヨハンナ・シュピリ『アルプスの少女ハイジ』
出演：アリス・ルーシー/マックス・ルドリングガー
/キャスパー・ヴァン・ディーン

みどころ

“B級映画”の定義は難しいが、私はB級映画が大好き！しかし、世界文学全集の1つとして有名な「アルプスの少女ハイジ」を“18禁”とし、スイス初の「エクスプロイテーション映画」を誕生させるとは！

現時点で最悪の大統領はロシアのプーチン氏だが、本作を見れば、自社製のチーズ以外を禁止する法律を制定した、スイスのマイリ大統領はそれ以上で、まさに最悪！前半から中盤にかけては、恐怖の独裁体制下でトコトン苦しむ“アルプスの少女ハイジ”の姿を確認し、後半からは“最強少女ハイジ”に変身し、復讐を決意していくストーリーを楽しみたい。

クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル Vol. 1』(03年)、『キル・ビル Vol. 2』(04年)は“復讐モノ、B級映画”の最高峰！ユマ・サーマンが演じた、あの復讐者のカッコ良さに、本作のハイジは及ぶべくもないが、それなりの努力は高く評価したい。“好評につき”第2作目も準備されるそうだから、それにも期待！



◆「アルプスの少女ハイジ」はスイスが誇る児童文学書として世界的に有名だが、『マッド・ハイジ』とは一体ナニ？チラシには『アルプスの少女ハイジ』が18禁で帰ってきた！「最強少女ハイジ、参上！復讐を胸に暴れまくる！」の文字が躍り、「スイス初のエクスプロイテーション映画爆誕！」と謳われている。

それらの“文字情報”にもビックリだが、チラシに写っている可愛らしい(?)武装姿(?)の少女は、「アルプスの少女ハイジ」ではなく、これぞまさに「マッド・ハイジ」。

◆2022年2月24日のウクライナ侵攻以降、世界で最も危険な大統領はロシアのプーチン大統領。それが西側民主主義国の常識だが、それが同時に“世界の常識”と言えないところが悩ましい。しかし、チーズ製造会社のワンマン社長にしてスイス大統領でもある

強欲なマイリ（キャスパー・ヴァン・ディーン）が、自社製品以外の全てのチーズを禁止する法律を制定し、スイス全土を掌握し、恐怖の独裁者として君臨している本作冒頭の姿を見ると、それはプーチン以上の最悪の大統領！

私は1997年にはじめて約1週間のヨーロッパ旅行をした際にスイスも訪れたが、本作冒頭のスクリーン上に映るアルプスの山々の風景は、その時に見たのと同じように美しいもの。しかし、それから20年後、年頃になったハイジ（アリス・ルーシー）はアルプスで暮らしていたが、恋人のペーター（ケル・マツェナ）が禁制のヤギのチーズを闇で売りさばいたことの見せしめとして、ハイジの目の前で処刑されてしまうことに。さらに、唯一の身寄りである祖父（デヴィッド・スコフィールド）までも、マイリの手下に山小屋ごと包囲されて爆死。さあ、ハイジはどうするの？

◆私はB級映画が大好き！B級映画の定義は難しいが、「これはB級！」「俺はB級！」と公言した上で、作品を発表するのは勇気のいるものだ。B級映画の“代表”は、私の理解では、今はすっかり巨匠になってしまった、若き日のクエンティン・タランティーノ監督（？）だが、スイス出身の監督とプロデューサーが、B級エログロバイオレンスバージョンにアレンジした、“スイス映画史上初のエクспロイテーション映画”は、世界19カ国538人の映画ファンによるクラウドファンディングで、約2億9000万円もの資金が集まったそうだからすごい。

クララ（アルマル・G・佐藤）と共に矯正施設に収容されてしまったハイジの前途に残忍な運命が待ち構えていることは必至だが、『大脱走』（63年）のような完璧なチームワークを組んでも実現できなかった“大脱走”は可能な？また、『パピヨン』（17年）（『シネマ45』127頁）では、何度も失敗した上、最後にやっと脱走を成功させたが、その時主人公は既に老人になってしまっていた。しかし、本作におけるハイジの矯正施設からの脱走は、マイリに対する復讐とスイスという国を立ち直らせるためだから、早期の脱出が不可欠だ。

しかして、本作中盤のB級エログロバイオレンスバージョンにアレンジした、“スイス映画史上初のエクспロイテーション映画”の（ハチャメチャな）展開は？

◆タランティーノ監督のB級映画（？）最大のヒット作である『キル・ビルVol.1』（03年）（『シネマ3』131頁）、『キル・ビルVol.2 ザ・ラブ・ストーリー』（04年）（『シネマ4』164頁）は、何といっても女優ユマ・サーマンの魅力が光っていた。大柄で派手な顔立ちのユマ・サーマンなればこそ、梶芽衣子の“怒み節”をテーマにした、刀を振り回しての復讐劇がメチャ面白かったわけだ。ブルース・リーの没後半世紀となる2023年の今、『ドラゴン危機一発』（71年）、『ドラゴン怒りの鉄拳』（72年）、『ドラゴンへの道』（72年）、そして『燃えよドラゴン』（73年）、等の魅力が見直されているが、ブ

ルース・リーの肉体能力はとにかくすごかった。

しかし、それらに比べると、命からがら1人だけでの脱出を成功させた“アルプスの少女ハイジ”が、ファンタジーのような世界（観）の中で“最強少女ハイジ”に変身していく本作中盤のストーリー展開にはいささか不満がある。少なくとも、あのコスチュームは“アルプスの少女ハイジ”に固執しすぎでは？また、刀ですらユマ・サーマンのように見事に振り回せないハイジがああ重い槍（？）を使いこなすのは、かなり無理があるのでは・・・？

しかして、本作ラストのハイライトとなる復讐の舞台は古代ローマの円形闘技場（コロッセオ）を彷彿させる闘技場だが、そこでハイジは一体誰と戦うの？そして、マイリ大統領はその場に、どんな立場で、何をするために出席しているの？

◆暑い夏には、涼しくなるために“怪談モノ”や“ホラーもの”がよく上映される。『四谷怪談』（49年）のような邦画の定番ものは少なくなったが、洋画では各種各様のホラー映画が大量生産されている。そんな映画では残忍なシーンがてんこ盛りだが、B級映画にも大量の出血シーン等のエログロナンセンスシーンがよく似合う。そのため、“B級性”を売りモノにした本作では、導入部で見るペーターの処刑シーンから、エログロ性が満載！それは中盤でも途切れることなく、次々に登場する殺人シーンにおける残忍性、エログロ性はそれなりのものになっている。すると、本作ラストのクライマックスにおける最強少女ハイジによるマイリ大統領への復讐の残忍性とエログロ性は？

それはあなた自身の目で確認してもらいたいですが、ここで私が納得できないのは、死んだはずのハイジのおじいさんが謎の復活（？）を遂げた上、新たに“老人3人組”を結成して、反マイリ勢力を結集し、あるべきスイス国を取り戻すべく闘技場に向けて一斉に武装蜂起に及ぶことだ。“最強少女ハイジ”を主人公にした本作では、この武装蜂起はあくまでハイジによるマイリ大統領への復讐が終了した後、という設定になっているが、こんな設定はナンセンス。ロシアのプーチン大統領の下ですら、“プリゴジンの武装反乱”は失敗したのに、あれほどの独裁政治、恐怖政治を完成させたマイリ大統領の下で、じいさん3人組をリーダーとする民衆の武装蜂起が成功するはずがない。このストーリー展開は“最強少女ハイジ”を主人公として浮かび上がらせる上でもマイナスだったのでは？

ちなみに、本作は大好評（？）につき、第2作目がハイジとクララの2人を主人公にして作られるらしい。私はそれを楽しみにしつつ、次回作ではじいさん3人組は回想シーンの登場のみにしてもらいたいと願っている。

2023（令和5）年7月24日記